

【目次】

1. 企画展「賀川豊彦と友愛会・総同盟」がオープン、7月6日！
2. 公開報告会「社会主義インターの歴史と現在」（佐瀬昌盛氏）を開催、6月23日！
3. 連載「日本労働会館物語」第66回—労働運動家・賀川豊彦 その1—

1. 企画展「賀川豊彦と友愛会・総同盟」がオープン、7月6日！



2017年は賀川豊彦（1888～1960）が友愛会の活動に加わってから100年という節目の年に当たります。友愛労働歴史館はこれを記念し、7月6日より企画展「賀川豊彦と友愛会・総同盟」（2017.7.6～12.22）をスタートしました。

「賀川豊彦」展では、第1部で賀川豊彦（1888～1960）の71年の生涯について概観。第2部では1917（大正6）年に友愛会の活動に参加し、関西労働運動を主導した労働運動家・賀川豊彦と、彼の労働運動理論「賀川イズム」について紹介しています。また、第3部では1921年の川崎・三菱両造船所争議後、基督教伝道、農民運動、協同組合運動など新たな舞台へ進んでいった賀川について浮き彫りにしています。

本企画展の狙いは労働運動家・賀川豊彦の紹介であり、次の4点がポイントとなっています。

①賀川豊彦は5年間、友愛会・総同盟のリーダーだった（大正6年～大正10年）

賀川豊彦（1888.～1960）はキリスト教伝道者・社会運動家として知られていますが、また大正6年から大正10年の5年間、友愛会・総同盟の活動家として労働運動を主導しました。

②賀川豊彦の労働運動理論は、「賀川イズム」と呼ばれた

「賀川イズム」の背骨（はいこつ）は友愛会・総同盟に引き継がれ、「健全なる労働組合主義」となり、戦後は自由にして民主的な労働運動の基本理念となりました。

「賀川イズム」＝自由組合主義+漸進主義+合法主義+非暴力主義

③賀川豊彦は大正10（1921）年の川崎・三菱争議を指導した

大正10（1921）年に神戸で起きた川崎・三菱両造船所争議は、日本労働運動史上最大の労働争議ですが、この争議を指導したのが賀川豊彦です。

④賀川豊彦は労働運動や日本労働会館（現友愛会館）建設を資金面で支えた

賀川豊彦は『死線を超えて』などの印税収入で労働運動を支えました。また、彼は昭和5年に総同盟が惟一館を買収したときも安部磯雄や新渡戸稲造、吉野作造らと資金面で支えました。

2. 公開報告会「社会主義インターの歴史と現在」（佐瀬昌盛氏）を開催、6月23日！



友愛労働歴史館は佐瀬昌盛氏（防衛大学校名誉教授）を招き、6月23日（金）14：00～16：00に友愛労働歴史館研修室で、第15回政治・社会運動史研究会を公開報告会の形式で開催しました。テーマは「社会主義インターの歴史と現在」、参加者は約30名でした。報告会では佐瀬昌盛氏より1時間15分程の報告を受け、その後、質疑・意見交換を行いました（詳細は略）。

3. 連載「日本労働会館物語」第66回—労働運動家・賀川豊彦 その1—

「愛と協同」を掲げた社会運動家・賀川豊彦（1888～1960）は、また一時期、友愛会・総同盟のリーダーであり、「日本労働運動の母」（西尾末廣）と呼ばれました。今回はその西尾末廣（労働運動家、政治家）の言葉を紹介します（「賀川豊彦全集」月報4、1962年。一部略）。

「わが国の労働運動や社会運動は、とくにその初期において、キリスト教の影響をうけることが多かったし、優れた指導者が輩出して、大きな功績を残している。その中でも、私にとって忘れることのできない人は、安部磯雄氏と賀川豊彦氏である。両先輩ともに、今の言葉で言えば民主社会主義者であり、議会主義者であった。そして何よりも、徹底した信念の人であった。

賀川さんは、大正七年から十一、二年ごろまでの数年間、関西における労働運動の中心的指導者だった。賀川さんが労働運動に入った動機は深くは知らない。それは多分、神戸の貧民街でのイエス団の運動から生れた必然の発展だったのであろう。また第一次世界大戦のさなか、二年九カ月にわたって米国に游学し、キリスト教の伝道に従事するかたわら、先進国の労働運動を実地に見聞して帰国した直後のことであることも見逃すわけにはいくまい。

そのころ、私もまた関西にあって、当時の友愛会の責任者になっていた。自然、賀川さんと私とは同じ友愛会ないし総同盟の幹部として、常時顔を合わせるようになった。その間、一貫して賀川さんが労働組合主義者であり、民主主義、議会主義を通じて労働階級の地位を向上させ、革命なくしてそのいわゆる「人格的社会主義」を実現しようとしていた。

賀川さんが労働運動に挺身していた時期は、第一次大戦後の激動期で、革命的なサンヂカリズムの思想が一世を風靡していた感があった。議会否認、普選反対、直接行動謳歌の風潮に対して、賀川さんは敢然として立ち向い、これと闘った。そして常に、じゅんじゅんとして議会主義を説き、漸進的な労働組合運動の必要を力説した。殊に、私の印象に残っているのは、大会や集会などで激越なアジ演説が会場の空気を支配すればするほど、賀川さんは一層冷静な調子で持論を説き、過激分子の反省を求めたことである。のちに、大正十三年の大会で総同盟は有名な方向転換宣言を行ない、その運動方針を現実主義の方向にあらため、普選獲得運動についても積極的にこれに協力することとなったが、これには賀川さんの努力が大いにあずかっている。

その後、サンヂカリズムに代って、マルクス・レーニン主義が盛んになっても、賀川さんはその態度を変えなかった。実に、信念の人だったと思うのである。

賀川さんは、優れたキリスト教の信者であると同時に、その教義の実践者であったが、しかし、いわゆる政治家の部類に入る人ではなかった。夢多き詩人であった。生前、賀川さんを政界に出そうとする動きはしばしばであったが、私はいつも反対したものである。賀川さん自身はどう考えていたか知らないが、私にとって賀川さんは政治家以上のものであったからである。」

「人間の尊厳、進歩と発達のために」

発行：友愛労働歴史館

責任者：徳田 孝蔵

担当者：間宮悠紀雄

〒105-0014 港区芝 2-20-12

友愛会館 8F

Tel.050-3473-5325

Eメール yuairedorekishikan@rodokaikan.org HP <http://www.yuairedorekishikan.com>

惟一館から123年、友愛会から105年
